映画『風と共に去りぬ』トリヴィア

――画面に見るアメリカ南部の歴史と文化――（3）

中　村　紘　一

（前号からの続き）

第3部　タラの再建

画面34　「大いなる侵略者」シャーマンのジョージア進軍

上

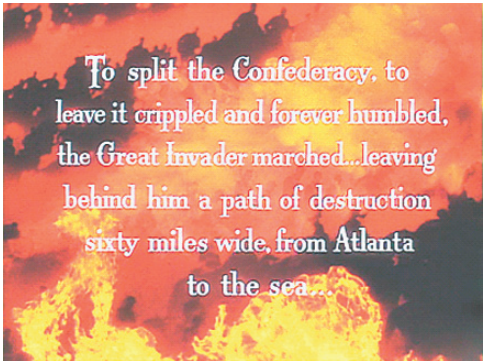
「そして、風はジョージア州を一掃した」（And the wind swept through Georgia.）

「シャーマン！」(SHERMAN!)

のタイトルの2つのショットの後、

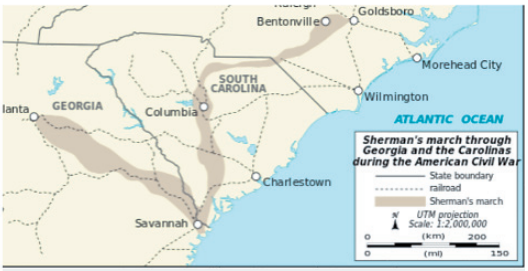
「南部同盟を分断、無力にし、永遠に貶めるために、大いなる侵略者は進軍して来て…アトランタから海まで幅60マイルの破壊の道を残して行った…」(To split the Confederacy, to leave it crippled and forever humbled, the Great Invader marched ... leaving behind him a path of destruction sixty miles wide, from Atlanta to the sea ...)

と続く。



ここでの「大いなる侵略者」とは北軍の将軍ウィリアム・T・シャーマン(1820-1891)のことで、彼はアトランタを焼き払った（焦土作戦）(1864年9月)後、サヴァナまでジョージア州焦土進撃作戦「海への進軍」（同年12月）、サヴァナからの「北上作戦」（1865年3月）により、南部経済を壊滅、南北戦争終結を早めた。近代戦略の実行者、近代戦の創始者、最初の近代将軍と言われている。

1864年頃の
シャーマン将軍



「海への（ジョージア州）進軍」、「北上作戦」地図

アレクサンダー・H・リッチー（1822−1895）作
「海への進軍」彫画（メゾチント）

そして、

「タラは生き延びた…が、敗北の地獄と飢餓に直面しなければならなかった」(Tara had survived ... to face the hell and famine of defeat)のタイトルのショットが来る。

画面34中　タラ再建のため妹たちを叱咤激励するスカーレット

1864年11月午後

オハラ家の娘たち（スカーレット、スエレン、キャリーン）はいわゆる「サザンベル」で、これまで野良仕事などしたことがなかった。しかし、飢餓に打ち克ち、タラの再建を誓ったスカーレットは先頭に立って野良に出、妹たちにも綿摘みなどの過酷な労働を強いる。耐えかねたスエレンが「タラなんか大嫌い」と言うと、スカーレットは憤激のあまり頬を平手打ちして、「タラが嫌いなどと二度と口にしてはならない！それはパパとママを憎むことに他ならない」と罵倒する。

ここでのスカーレットは、**画面9**で「タラなんか欲しくないわ。農園なんて何にもなりはしないわ」と言っていた娘とはすっかり別人のようである。彼女の言葉は「一滴でも体内にアイルランド人の血を持つ者には、自分が住む土地は母親のようなものなのだ」と諭していた父ジェラルドにそっくりである。

画面の奥には北軍が放った火で黒焦げになった奴隷小屋（cabin）と立木が見

える。

画面34下　スカーレット、北軍脱走兵を射殺

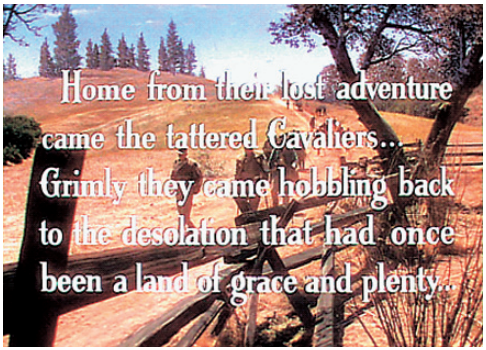
そんなある日、タラの屋敷に北軍の騎馬脱走兵が侵入してきて装身具の入った母の裁縫箱を物色。スカーレットは隠し持ったピストルで脱走兵を射殺。居合わせたメラニーといっしょに、脱走兵の着ていた軍服（北軍の制服の色はブルー、南軍のそれはグレー）のポケットや背嚢から現金を奪って食料購入に当てることにする。スカーレットはタラ（の家族）を守るためとはいえ、殺人を犯したことに恐ろしくなるが、「今は考えまい。明日考えることにしよう」“Oh, I won't think about that now. I'll think about that tomorrow.”と自らに言い聞かせる。

画図35 1865年5月、リー将軍降伏の知らせ

同年9月、カーペットバガー

ジェラルド・オハラは南軍（リー将軍）の降伏を5月になってから知って家族に伝えるが、すでに4月9日にはリー将軍が北軍グラント将軍にヴァージニア州中南部の町アポマトックスで降伏して南部は敗北していた。南北戦争は世界で最初の総力戦のひとつだった。最終的な動員兵力は北軍が156万人、南軍が90万人に達した。両軍合わせて62万人もの死者を出し、これはアメリカがこれ以降、今日まで体験している戦役史上、最悪の死者数である。

画面35上　南部兵たちの帰還、　アシュリーの帰還



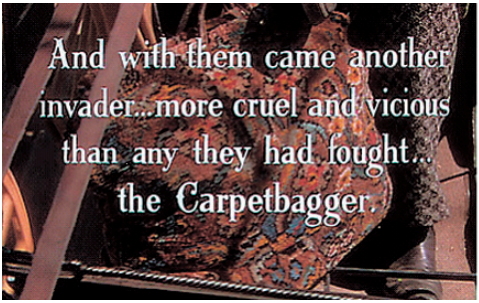
Home from their lost adventure	戦に破れ、ぼろぼろになって
came the tattered Cavaliers ...	南部兵たちは帰郷してきた。
Grimly they came hobbling back	険しい顔つきで足を引きずり、
to the desolation that had once	かつては優雅と富の地が
been a land of grace and plenty…	廃墟に化した所に帰ってきた。

（英文の背後には、帰郷する南軍敗残兵たちの姿が見える。）

南部帰還兵のなかには、スポットシルバニアの戦い（ヴァージニア州、1864年5月）で捕虜になったアシュリーも含まれていた。アシュリーのタラへの帰還はメラニー（そして、スカーレット）を喜ばせたが気力の失せたアシュリー

はタラ再建のためには無力であった。

画面35中　新しい侵入者—カーペットバガー



And with them came another	そして、彼らとともに、これまで戦った
invader ... more cruel and vicious	どの相手よりもさらに、
than any they had fought ... the	残酷で悪辣な侵略者
Carpetbagger.	カーペットバガーがやってきた。

（英文の背後に見えるのが、カーペットバガーが携帯するカーペットバッグ（カーペット地の旅行かばん））。

カーペットバガーとは南北戦争後の再建時代　(1865 − 77) に、プランテーションを叩き売りの値段で購入するためにカーペットバッグに札束を詰め込んで南部にやってきた北部人のことで、彼らは南部の敗戦に付け込んで、さまざまな利権を漁り大農園主を搾取するために政治的・経済的悪徳行為を働いた。後にもっと広くいわゆる「渡り政治屋」を意味するようにもなる。下の図は、カール・シュルツ（米国のジャーナリスト、1829 − 1906）が1872年に描いたカーペットバガーの風刺漫画。

画面35下 カーペットバガーに変身したウィルカーソン

左側の人物はかつてタラ農園の奴隷監督をしていたが不祥事を起してクビになったヤンキーのウィルカーソン（**画面11**参照）で、彼は解放されたばかりの黒人（右の人物）とともにカーペットバガーとして、タラの農園を買い付けに来る。再度訪れた時にはスカーレットから石礫（赤土）を喰らって追い返される（ジェラルドは馬でウィルカーソンに追い打ちをかけるが、横木の柵を越そうとして失敗、落馬して死ぬ）。

ここで黒人のカーペットバガーが嬉々として唄っている歌は「ジョージア行進曲」（“Marching through Georgia”）である。これはシャーマン将軍の焦土作戦と「海への行進」（**画面34**参照）を讃えた有名な歌で、コネチカット州出身のヘンリー・クレイ・ワークが1865年に作曲。下はその楽譜と歌詞。

Marching through Georgia

Bring the good old bugle, boys, we'll sing another song
Sing it with a spirit that will start the world along
Sing it as we used to sing it, 50,000 strong
While we were marching through Georgia.

Chorus
Hurrah! Hurrah! we bring the jubilee!
Hurrah! Hurrah! the flag that makes you free!
So we sang the chorus from Atlanta to the sea
While we were marching through Georgia.

少年たちよ、古き良きラッパを持ってこい、われわれは新しい歌を唄うのだ
世界を新しく始めるような心でそれを唄うのだ
われら5万の強兵たちがジョージア州を行進していたときに
いつも唄ったように唄うのだ。

コーラス
バンザイ！バンザイ！われわれは歓喜をもたらす
バンザイ！バンザイ！諸君を自由な身分にする旗を掲げる
だから、われらはジョージア州を行進していたときに
アトランタから海まで声を合わせて唄ったのだ。

なお、この歌は日本ではすでに明治時代に楽譜が販売されており当時から愛唱されていたという。大正時代に入って、演歌師の添田知道(芸名、添田さつき)がこの歌のメロディーに歌詞をつけたのが「パイノパイノパイ」(「東京節」)

というコミックソングで、大いに流行し、その後現在に至るまでさまざまな替え歌が作られてきた。

参考　「東京節」歌詞の1番、「東京の中枢は丸の内/日比谷公園、両議院/いきな構えの帝劇に/いかめし館は警視庁/諸官省ズラリ馬場先門/海上ビルディング、東京駅/ポッポと出る汽車どこへ行く/ラメチャンタラ、ギッチョンチョンで/パイノパイノパイ/パリコト、パナナで/フライ、フライ、フライ」。

画面36　300ドルの税金を工面するためにレットに会いに（アトランタに）行く

カーペットバガーは農園の課税をつり上げ農園主に支払い不可能に陥らせて大農園を手に入れようと画策した。タラ農園に対する課税は300ドル。スカーレットの手元には10ドルしかなかった。切羽詰ったスカーレットはアトランタで投獄されているレットを訪れる。カーテンを裁断したドレスを身に付けて窮乏状態であることを悟られないようにしたが、手が荒れているのを見つけられて、金の無心であることを見破られてしまう。

レットに借金を断られたスカーレットは屈辱感を抱いて去る。

画面37

画面37上　「40エーカーの土地とラバ1頭」（1865年1月施行）

レットと別れたスカーレット（とシャペロン役のマミー）は戦中よりはるか

に活気のある新生アトランタを目撃する。新築中の建物、街頭で暗躍するカーペットバガーたち、そして、その中で、石鹸箱に立って解放黒人たちに演説する者がいた。彼は「40エーカーとラバ1頭（40 acres and a mule）」と書かれたプラカードを掲げ、大声で「君たちにこれを提供する」と訴えていた。その理由は「われわれは君たちの友であり、君たちには投票権が与えられるが、その時には友がするように投票してくれるだろうから」Because we're your friends and you're going to become voters - and you're going to vote like your friends do. というものだった。

「40エーカーとラバ1頭」とは、南北戦争後に解放された黒人奴隷（解放奴隷）に対して北軍政府（解放奴隷局）が約束した補償を意味する標語である。農地とするための40 エーカー（16 ヘクタール）の土地と、犂を引かせる1頭のラバを与えることにより、その土地で耕作可能にするものだった。これは以前に白人が所有していた土地の使用許可で、世帯主に対して与えられた。この補償は1865年1月16日にウィリアム・T・シャーマン将軍が発布した第15土地特令の産物であった。

1865年までに約10,000人の解放奴隷たちが、ジョージア州とサウス・カロライナ州の400,000エーカーの土地に移り住んだ。その後すぐ、 アンドリュー・ジョンソン大統領は特例を取り消し、元の白人の地主に土地を返還した。このためこのフレーズは、南部再建および解放奴隷支援における失敗を、そして、彼らに対する「破られた約束」を意味するものとして知られている。

参考

エーカー (acre) とは、ギリシャ語で牛の軛（くびき）を意味する言葉に由来する。そこから、「雄牛2頭引きの犂を使って1人が1日に耕すことのできる面積」としてエーカーという単位が作られた。1エーカーは約1,200坪の広さ。おおよそ、サッカーグラウンド1つ分に相当する。

画面37下 「故郷の人々」をハーモニカで吹く解放奴隷

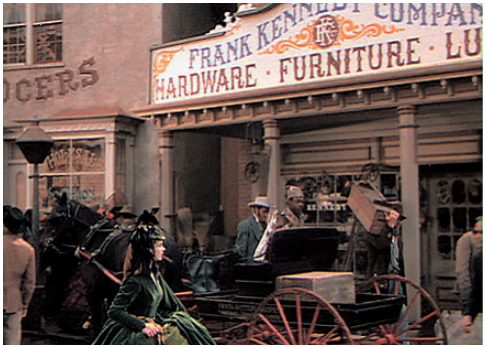
上の街頭演説の場面に続いて、スカーレット（とマミー）はハーモニカの伴奏でタップダンスに興じている解放黒人たちの間を通り抜ける。画面左隅の黒人がハーモニカで吹いている曲はこれまた「故郷の人々」である。「懐かしのプランテーションを慕う」"longing for de old plantation"この歌を演奏するのは、カーペットバガーや再建論者が打ち出す「40エーカーとラバ1頭」の政策がやがて空手形に、「破られた約束」になることを皮肉っているように聞こえる。なお、このハーモニカ演奏はスクリプトにないアドリブである。

「解放局は、政治にばかり力をそそぐので、かつての農園主のように病気の黒人まで世話するわけにはいかなかった。（省略）田舎の高齢の黒人たちは、せがれどもに見すてられ、雑踏する町で途方に暮れ、恐怖におそわれ、歩道の縁石にすわりこんで、通りすがりの婦人たちに泣き泣き訴えた。『お嬢さま、奥さま、おねがいでごぜえます。わしのむかしのご主人さまに手紙を書いてくだせえまし。…ご主人さまは、この老いぼれ黒ん坊を、また連れもどしてくだせま

すだ。ほんとに、解放なんて、もうたくさんでごぜますだ』」（ミッチェル『風と共に去りぬ』大久保康雄、竹内道之助訳（新潮文庫）④第4部37章pp.100-101.）

画面38　ケネディの店（アトランタ）

上



レットから300ドルの調達に失敗したスカーレットは偶然妹スエレンの婚約者ケネディに会う。ケネディは年配の冴えない男だが商才あって戦後アトランタで店を構え、羽振りのいいことをスカーレットは知る。画面上はHARDWARE,FURNITURE,LUMBER（金物、家具、材木）を商うFRANK KENNEDY COMPANY(フランク・ケネディ会社)の看板を掲げた店を見るスカーレット。

中　スカーレット、ケネディを騙して結婚（1866年冬）

スカーレットはケネディから300ドルを調達するために一計を案じ、妹が心変わりをしたと嘘をつき、彼を巧みに誘惑して自分と結婚させる。人のよいケネディは「初めてロマンチックなことをした」と有頂天になり、スカーレットを仕合せにするために300ドルの小切手を渡す。タラ再建のためにはスカーレットは騙し、妹の婚約者まで横取りした。

下　アシュリーとケネディ、共同経営の製材所

やがて彼女は夫に代わって経営の実権を握るようになり、出獄してきたレットから借金してアトランタ郊外の製材所を取得する。アシュリー・ウィルクスに未練を残すスカーレットは彼をタラから呼び寄せて製材所を彼との共同運営にする。

WILKES & KENNEDY と名付けられた製材所の看板。 ここでのスカーレットの経営手法は囚人を過酷な条件で使用するなど容赦の無いものだった。

原作（小説）ではスカーレットはフランク・ケネディの子（女子、名前はエラ・ロリーナ）を儲けるが、映画では削除されている。

画面39　アトランタのシャンティタウン（スラム街）

そんなある夕方、スカーレットは一人でバギー（軽装四輪馬車）を駆って製

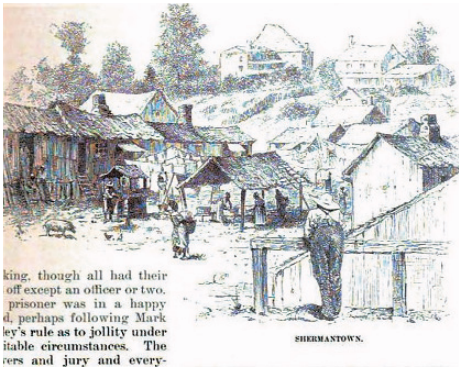
材所からの帰り道、アトランタのシャンティタウンを通り抜けねばならなかった。

上　シャンティタウン

「スラム街（the Shantytown settlement）の盆地におりる、裸の木にはさまれた道の近くにさしかかると、彼女（スカーレット）は声をかけて馬をいそがせた。うち捨てられた軍隊のテントや、平板づくりの黒人小屋などが、ごみごみ群がるこのきたない部落を通るときには、いつもなにか不安を感じないではいられなかった。ここはアトランタ近辺でも、もっとも評判の悪い場所で、黒人のならず者や、黒人の売春婦などの巣窟だった。それにまじって、もっとも下層階級に属する貧乏白人（プア・ホワイト）が若干住んでいた。黒人や白人の隠れ家もここで、ヤンキーの兵隊なども、犯人をさがすときには、まず第一にここをしらべるとさえいわれていた。」（ミッチェル『風と共に去りぬ』大久保康雄、竹内道之助訳（新潮文庫）④第4部44章pp.369-370.）

(シャンティタウン shantytown ― shanty= 掘っ建て小屋, 仮小屋)

（参考　アトランタ近郊のシャンティタウンの1つ「シャーマンタウン」*Harper's New Monthly Magazine* 誌挿絵、1880）



スカーレットたちの住まいのあった「ピーチツリー街」(Peachtree Avenue)と製材所に行くために通らなければならなかった「デケター通」(Decatur Street)は現在のジョージア州立大学(Georgia State University)キャンパス角で交差している。

下　シャンティタウンで襲われるスカーレット（1867年）

スカーレットはシャンティタウンで貧乏白人と仲間の黒人に襲われる。が、たまたま居合わせたタラ農園のかつての奴隷ビッグ・サム（**画面8、画面30**参照）に助けられる。

画面40　KKKシャンティタウンに報復、アシュリーの負傷とケネディの死（1867年3月）

衣服が破れ髪は乱れたまま、スカーレットはピティ叔母の屋敷に戻る。妻をやさしく迎えたフランク（・ケネディ）は、今夜はメラニーの家で留守をするようにと述べて、政治集会に出かける。政治集会とは口実で、実はアシュリー、ミード医師たちなどとともにKKKとしてシャンティタウンに報復に向かったのだった。そのことを知らないスカーレットは夫の薄情を詰りつつ、女ばかりが留守をしているメラニー家で裁縫をし、メラニーの文学作品朗読を聴きながら男たちの帰りを待つ。

上　シャンティタウン襲撃の廉で、北軍官憲に追われる夫たちの帰宅を待つ女たち

「クラン団――」

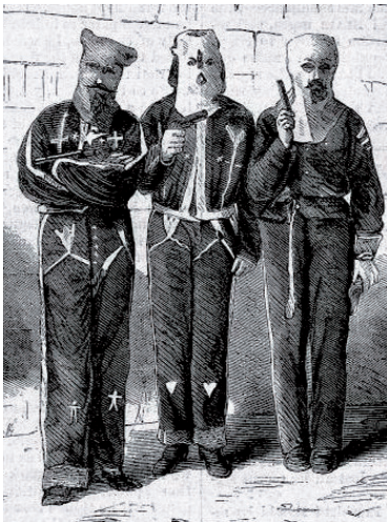
はじめ、スカーレットは、きいたこともなければ、どんな意味があるのかも知らないように口に出して無意味にそのことばをつぶやいたが、つづいて、「クラン団！」と、まるで絶叫するような声をだした。「まさかアシュリーがクラン団にはいっているんじゃないでしょうね！まさかフランクが！あのひとはあたしと約束したのよ！」

「もちろんケネディさんもクラン団にはいっているわ。それからアシュリーもね。あたしたちが知っている男の人たちは、みんなはいっているわ」とインディアは叫んだ。「みんな男ですもの。おまけに白人で、そのうえ南部人ですもの。あなたはフランクを自慢しなければならないのよ。それなのに、フランクは、あなたのために、なにか恥ずかしいことでもやるように、そっと抜け出して行かなきゃならなかったのよ。そして――」（ミッチェル『風と共に去りぬ』大久保康雄、竹内道之助訳（新潮文庫）④第4部45章p.414）

KKK（Ku Klux Klan）クークラックスクラン、あるいは単に the Klan クラン 団

南北戦争後再建時代に南部諸州に結成された自警団の秘密結社。白人至高を唱え解放黒人や北部共和党員を殺人などの暴力で威圧した。名前の由来はギリシャ語の「kuklos（円環、集まりの意）」の転訛と英語の「clan（氏族、一族）」を変形させたものと言われる。団員は「クークラクサー」、もしくは「クランズマン」と呼ばれた。彼らは白装束で馬に乗って黒人街に現れ、脅迫、暴行を加

えるようになった。さらにこれに批判的な白人にまで敵として暴力を振るい、投票権を行使しようとした黒人を殺害するに至った。1870年と71年に連邦議会は（平等）強制法（黒人に平等の権利を認めた）憲法修正 14 条 (Fourteenth Amendment) および15条 (Fifteenth Amendment) を可決して、クラン団の犯罪を訴追しその活動を抑圧して次第にその勢力を弱めていった。20世紀に入ると、KKKは形を変え復活・衰退を繰り返して生き長らえ、現在もなお幾つかの分派が活動を続けている。



初期のKKKメンバーを描いた絵

メラニーが朗読する作品は原作（小説）では、「南軍の兵士たちが愛読した[ヴィクトル・ユゴーの]『レ・ミゼラブル』[1862]で」、彼らは「野営の焚火の明かりでこれを読んでは、リー将軍をもじってたわむれに「リーズ・ミゼラブル」[リーのあわれな部下たち、の意]などとよんで、自嘲的に笑っていたものだ」。映画ではチャールズ・ディケンズの『デイヴィッド・コパフィールド』（1850）に替えられている。女たちが不安のなかで夫たちの帰宅を待っているのは、メラニーが第1章“I am born”から第9章”I have a memorable birthday”までを朗読する時間である。

下　酔っ払いのふりをしながら帰宅する男たち

シャンティタウン襲撃のおりアシュリーは北軍官憲の発砲を受け負傷していた（スカーレットの夫フランクは頭をぶち抜かれて死亡）。レット・バトラーはアシュリーたちが襲撃事件に関与していないアリバイ作りのために負傷したアシュリーたちをいったん娼館「ベル・ワトリングの店」に連れていき、そこから酔っ払いの振りをして妻たちの待つメラニーの家に帰宅させる。アシュリー逮捕を待ち構えていた北軍大尉は彼らの捨て身の演技に騙されて（それとも、騙されるふりをしてか）、誤解を詫びて退く。大尉の姿が見えなくなるやいなや、みんなは負傷したアシュリーの治療にとりかかる。

レット・バトラーたちが酔っ払いのふりをして高歌放吟するのは、原作（小説）では「歌のなかでもよりによっていちばんいやなシャーマン将軍の――『ジョージア行進曲』で、レット・バトラーが歌っていた」となっているが、映画ではスティーヴン・フォスター作詞作曲「主人は冷たい土の中に」（Massa's in De Cold Ground,1852）に替えられている。この変更はスクリプトで行われている。

Massa's in De Cold Ground

1

Round de meadows am a ringing

De darkey's mournful song

While de mocking bird am singing
Happy as de day am long
Where de ivy am a creeping
O'er de grassy mound
Dare old massa am sleeping
Sleeping in de cold, cold graound
(chorus)
Down in de cornfield
Hear dat mournful sound
All de darkeys am a weeping
Massa's in de cold, cold gound

1

草原に響きわたる
黒き同胞たちの哀歌
マネツグミたちは
とても楽しく歌っているけれども
ツタの生い茂る
草葉の陰の墳丘に
あの優しかった主人は眠る
冷たい、冷たい土の中で
（コーラス）
トウモロコシ畑の一面に
悲哀の歌が聞こえる
黒き同胞たちは涙を流す
主人が眠るのを、あの冷たい土の中で

この歌は日本では「春風」と題してして加藤義清の次のような歌詞で知られている。

1. 吹けそよそよ吹け春風よ/吹け春風吹け柳の糸に/吹けよ吹け春風よ/やよ春風吹けそよそよ吹けよ。

画面41　スカーレット、レットと結婚（1868年9月）

上

フランク・ケネディの死で、再び未亡人になったスカーレットがブランディを飲みながら傷心状態にあるところへレット・バトラーが訪れ、求婚する。スカーレットは「愛してもいないし、二度と結婚するつもりはない」と言いながらも、レットのこれまでに経験したことのないような激しいキスに圧倒されて結婚を承諾する。

中　アトランタに新しく建てたエレガントな大邸宅「コスグローヴ」

レットはスカーレットのために費用を厭わずタラ大農園を往時のように復活する。

さらに、アトランタに自分たちが住まう（大理石のテラスやステンドグラスの窓の付いた）エレガントな大邸宅を新築する。この邸宅にタラ大農園の召使いたち（プリシー、ポーク、マミー）を連れてくる。彼らはその邸宅の見事さに驚きぽかんとして立っている。

下　1869年春、Bonnie Blue Butlerの誕生

（スクリプトではBonnie Blue Butlerの誕生は1867年となっているが、これは明らかにおかしい。スカーレットの前夫フランクの死が1867年、スカーレットとレットの結婚は1867年で、2人の間にできた子ボニー・ブルーの誕生は1869年になる）。

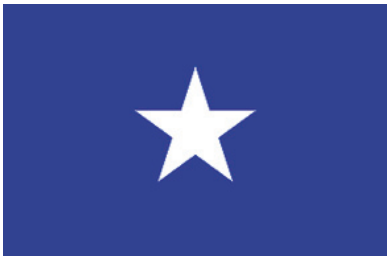
スカーレットは生まれてきた娘に2人の女王の名前をとってEugenie Victoriaと名付ける（それぞれフランス皇后、英国女王）が、レットは赤ん坊の彼女の眼が南部同盟旗「ボニー・ブルー・フラッグ」のように青いことから「ボニー・ブルー」Bonnie Blueと呼ぶことにする。（この時、ウエイド7歳）。

「ボニー・ブルー・フラッグ」（Bonnie Blue Flag）は、青地に白い一つ星の旗である。1861年、南部同盟の非公式の国旗として用いられた。また、この旗にちなんだ行進曲のタイトルでもあり、南部同盟のポピュラーな軍歌の一つで

あった。

原曲は「アイルランド軽装二輪馬車（Irish Jaunting Car）」で、それに北アイルランド・アルスター出身のハリー・マッカーシー、 Harry McCarthy (1834-1888)が歌詞をつけて、「ディキシー」と並んで最もポピュラーな南軍の軍歌となった。3番から6番までが南部同盟の成り立ちの経緯の歌詞となっているが、史実に必ずしも合っていない。

1866年北軍軍政下ではジョージア州の「各市に駐屯する北軍部隊の司令官は、一般市民にたいし、あらゆる権限をもっていた。…前に南部同盟にぞくした人間の娘や人妻が歌ってもさしつかえない歌もきめた。そのため、『ディキシー』や『美わしの青旗』Bonnie Blue Flagを歌うのは、反逆罪よりも罪一等軽い重犯罪に処せられた」（ミッチェル『風と共に去りぬ』大久保康雄、竹内道之助訳（新潮文庫）④第4部36章pp.96-97.）。



上、南部同盟旗「ボニー・ブルー・フラッグ。下、軍歌Bonnie Blue Flag（『美わしの青旗』）の1番

The Bonnie Blue Flag

We are a band of brothers and native to the soil

Fighting for our Liberty, With treasure, blood and toil

And when our rights were threatened, the cry rose near and far

Hurrah for the Bonnie Blue Flag that bears a single star!

Chorus:

Hurrah! Hurrah!

For Southern rights, hurrah!
Hurrah for the Bonnie Blue Flag that bears a single star

われらは兄弟，この土地の者
われらは自由のために戦う，財産・生命を賭け労苦を厭わず、
われらの権利が脅かされたとき，あちこちで雄叫びがあがった
一つ星の「美わしの青旗」に万歳!と
コーラス
万歳! 万歳!
南部の権利に万歳!
一つ星の「美わしの青旗」に万歳!

ボニー・ブルー誕生後、これ以上子供はいらいないという理由で（実は、アシュリーに対する貞節を守るために）スカーレットはレットと寝室を別にする。

そんな折、スカーレットはアシュリーと密会しているところをインディアに目撃され、社交界にスキャンダルとして広がったために、アシュリーの誕生パーティに出席することを躊躇する。レットはボニー・ブルーの将来のためには、嫌がるスカーレットを無理やりパーティに向かわせる。

画面42　アシュリーの誕生パーティ（1871年4月）

誕生パーティでは出席者の多くが敵意ある視線で見つめる中、女主人のメラニーだけはスキャンダルを信じず、スカーレットを優しく迎える。その結果、同席者たちも次第に態度を和らげ、アシュリーの誕生日を祝う歌“For He's a Jolly Good Fellow”を唄う。この歌は"Happy Birthday to You"についで誕生日によく唄われる歌である。アメリカでは1862年にはすでに唄われていた。

For He's a Jolly Good Fellow

For he's a jolly good fellow, for he's a jolly good fellow
For he's a jolly good fellow (pause), which nobody can deny
Which nobody can deny, which nobody can deny
For he's a jolly good fellow, for he's a jolly good fellow
For he's a jolly good fellow (pause), which nobody can deny!

彼はいいやつだから、いいやつだから
いいやつだから（一息入れて）、これは誰も否定できない
誰も否定できない、誰も否定できない
彼はいいやつだから、いいやつだから、
いいやつだから（一息入れて）、これは誰も否定できない！

画面42　レットのmarital rape（1871年）

上　レットの嫉妬

スカーレットがパーティから帰宅すると、レットはいつになく酔っぱらいアシュリーに対する嫉妬のあまりスカーレットの頭を割ってアシュリーへの想いを追い出すと脅す。

脅しに屈しないスカーレットに対して、レットは暴力的な行動に出る。

中　レット、嫌がるスカーレットを抱きかかえ階段を登って無理やり寝室に運び込む

原作（小説）ではスカーレットは傷つけられ叫び声をあげるが、映画ではもがき抵抗するだけになっている。

映画ではこの画面の後すぐ次の画面に移る。すなわち、寝室での2人の行動の映像は省略されているが、性行為が行われたことは言うまでもない。この行為はレットがスカーレットの同意なしに、そして抵抗にも拘らず、暴力的に行なったのだからレイプ（強姦）である。この場合は、夫婦間で行われた強姦(marital rape)である（ただしmarital rapeが犯罪であるかどうかは別問題）。

下

Marital rapeの翌朝 満ち足りた気分でスカーレットは“Ben Bolt”を唄う

レットによるrapeの翌朝、スカーレットは顔に微笑をたたえ満ち足りた表情を見せ、しかも鼻歌まで唄っている。

強姦によって性的興奮が刺激され満足を覚えるというのはrape fantasy（強

姦幻想）と呼ばれるものである。この幻想によって作られた文学、映画作品も多い。この夫婦間の強姦はスカーレットをアシュリーに忠節のための孤閨から、レットをアシュリーに対する嫉妬心から解放して性的快楽を与えたと言えよう。

スカーレットが口ずさむ "Ben Bolt”は作詞T.D.イングリッシュ（Thomas Dunn English）、作曲ネルソン・ニース（Nelson Kneass）の歌で、1848年ピッツバーグで初めて唄われて人気を博した。1830年代以後大いに流行した新型式のセンチメンタルな歌の有名な例とのことである。

スカーレットがこの歌を口ずさむ場面はスクリプトにはあるが、原作（小説）にはない。ちなみにスクリプトにはスカーレットが口ずさむフレーズまで書かれていて、それは“She(who) wept with delight when you gave her a smile And trembled with fear at your frown”である。ここでスカーレットは自分を「彼女」(Alice)に、レット・バトラーを「君」（Ben Bolt）になぞらえて唄っているとしたら、この時の彼女の心境は心から夫を愛する純情な妻のそれである。しかし、皮肉な見方をすれば、そのAliceも今では墓に眠っていると歌われていることはスカーレットとレットの関係にやがて終止符が打たれる結末を予兆している。

Ben Bolt

Oh don't you remember sweet Alice, Ben Bolt
Sweet Alice whose hair was so brown
Who wept with delight when you gave her a smile
And trembled with fear at your frown?

In the old church yard in the valley, Ben Bolt
In a corner obscure and alone
They have fitted a slab of granite so gray
And sweet Alice lies under the stone.

ああ、ベン・ボルトよ、可愛いアリスを憶えてないか
まっ茶な髪の可愛いアリスを
君が微笑むと嬉し泣きをし、
眉を顰めると震えていた彼女を？

ベン・ボルトよ、谷の古い教会墓地の
人目につかないひっそりした片隅に
彼らは灰色の御影石の板を置いた
そして可愛いアリスはその石の下で眠っている。

原作（小説）では、「翌朝」のことは次のように書かれている。

「…彼女を抱いて、暗い階段をのぼった男は、そんな男がいることすら夢にも見たことのない、まるで見知らぬ他人だった。そしていま、彼にたいして憎悪をわき立たせ、怒ろうとしても、それができなかった。彼は彼女をいやしめ、彼女の心を傷つけ、激しい狂気のような一夜を通して彼女を野獣のように自由にした。しかも彼女は、そのなかでよろこびにひたりきったのだ。」（ミッチェル『風と共に去りぬ』大久保康雄、竹内道之助訳（新潮文庫）⑤第5部54章p.284.）

ここでは、作者ミッチェルはスカーレットをrape fantasyのなかの女主人公に仕立て上げていることに間違いない。しかし、ミッチェルが彼女をそれだけの女主人公にとどめないでスカーレットをスカーレットたらしめているのは、次のように付け加えているためである。

「レットはあたしを愛している！　すくなくとも彼は自分でそう言ったのだ。…彼はあたしを愛している。ついに彼はあたしのものになったのだ。彼女は、ずっと以前、なんとかうまくまるめこんで彼女を愛するようにしむけることができれば、彼の傲慢な黒い顔の上で鞭をふりまわして屈服させることもできるだろうと思ったが、そのことを、ほとんど忘れていた。いま、ふとそのことを思い出して彼女は大きな満足をおぼえた。一晩じゅう彼は思いのままに彼女をおもちゃにした。しかし彼女は、いま彼の武装の弱点を知ったのだ。これからさきは、彼を、思いどおりひきまわすことができるだろう。長いあいだ、彼女はレットの嘲弄に苦しめられてきた。だが、いまこそ彼に命じて、こちらの望む輪をくぐらせることができるのだ。」（同pp.285-286）

画面43　ボニーの乗馬と死（1873年）

ボニーが誕生したとき、レットは嬉しさのあまり、「この子には町で一番のポニー（小馬）を買ってやる、チャールストンで一番の学校で学ばせてやる」と約束したとおり、ボニーが4歳の誕生日の祝いにポニーを与える。

上　可愛い乗馬服で乗馬の訓練を受けるボニー

下　ボニーは無理な障害を乗り越えようとして落馬、死亡

ボニーはレットとスカーレットの制止も聞かずにバーを高くした障害に向かう。

それを見て、スカーレットは「パパそっくりね！」と当惑して言ってはみたものの「突然その顔には恐怖が走った。2人の振る舞いが似ていることに気づいたからである。本能的に彼女は次に起こる出来事がわかった」（スクリプトより）。乗馬好きだったスカーレットの父ジェラルドは無謀な乗り方をして怪我をすることがあり、最期も落馬が原因だった。

画面44　メラニーの死（1873年9月）

最愛のボニーを亡くしたレットは悲しみのあまり酒浸りになりボニーの葬儀もさせないありさまであったが、メラニーの必死の説得のおかげで立ち直る。しかし、この直後、メラニーはリスクを伴う身体でありながら妊娠をしていたせいで倒れ、流産で死去。

危篤のメラニーと最後の別れをするスカーレット

メラニー　「わたしに代わって彼（アシュリー）の面倒をみてちょうだい。彼に代わってわたしの面倒をみてくれたように」。
「でも彼にはさとられないようにね」。
「バトラー船長にはやさしくね」。「彼はあなたをとても愛しているのよ」。

アシュリー「わたしには彼女（メラニー）は現実に直面しても消えることのない唯一の夢だった」。

スカーレット「ああ、アシュリー、あなたが愛しているのはわたしではなくて彼女、とずっと前に言うべきだったわ、名誉だとか何とか言ってわたしを宙ぶらりんな状態にしておかずに。でも、今になってレットにとってのあのワトリングくらいにしかあなたにはわたしは 意味がないと言うのね」。

妻の死に打ちひしがれたアシュリーが頭をスカーレットの胸に押しつけるのを見て、レットは「嫌悪と諦めの混じった表情で、帽子とコートを手にして立ち去る」（以上、スクリプトより）。

この時になってやっとスカーレットは自分が本当に愛していたのはレットであることに気づいて、その姿を追う。

画面45　レットとの別れ－再びタラへ（1873年）

上　レットはアトランタを去って、故郷チャールストンに向かう

レット「自分は自分の居所であるチャールストンに戻る」。

スカーレット「お願いだから、わたしも連れてって」。

レット「駄目だ。自分はここのあらゆることとお終いにするのだ」。

（彼は鞄を置くと立ち止まり、スカーレットを見る。遠くを眺める目付きで――これは新しいレット、われわれにとっても、彼にとっても新しいレットである）。

レット「自分は安らかさが欲しい…魅力と優雅な生活に何かが残っていないか見てみたい…」。

スカーレット（彼を追って階段を駆け下りながら）「ああ、レット！レット！レット！レット！レット！」。（玄関にたどり着くと）「でもレット、あなたが行ってしまえばわたしはどうすればいいの、どうすれば？」。

レット（ドアまで行くとそれを開けて）「お前さん、それはおれの知ったことじゃない」。

（以上、スクリプトより）。

かくして、レットは立ち込める霧のなかに姿を消していく。アトランタを去って故郷チャールストンに向かったのだ。(チャールストンはサウスカロライナ州の港湾都市、その港には南北戦争のきっかけとなったサムター要塞がある)。

下　3度繰り返される重要なシーン、その3

(スカーレットは茫然自失の状態で残される)。

スカーレット「彼を行かせるなんてできないわ！できない！今は彼を失うことについて考えられない。考えたら気が狂うわ！…明日考えることにしよう」。

突然、サウンドトラックにジェラルドの声が聞こえる。

ジェラルドの声「スカーレット、おまえにはタラは無意味だと言うのか？」

「たった一つ大事なもの、永遠に残る唯一のものだ！」。

(続いて)

アシュリーの声「気づいてないかもしれないが、君がわたしよりももっと愛しているもの――それがタラだ」。

レットの声「おまえの活力の源――それがタラの赤土だ！」。

(もう一度、同じ台詞を繰り返す3人の声が聞こえる)。

スカーレット(顔を上げて)「タラ！故郷！…故郷に帰ろう…そして彼を取り

戻す方法を考えよう」。

（彼女は顎をさらに高く上げる。われわれには彼女に彼女たらしめているものがわかる。いつまでも打ちひしがれてはいまいと知って心ときめく）。

スカーレット「何たって、明日という日もあるのだから」。

（ゆっくりディゾルブ）

（フルショット――タラの光景――日没）

（かつてジェラルドがスカーレットと話をした所にある大木。丘の背後からスカーレットのシルエット像が現われ、空に沿ってその輪郭を写し出して立ち止まる。彼女は半回転して広い土地を見渡す。風がかすかに彼女のスカートをなびかせる）。

（かつてスカーレットとジェラルドの場面でそうしたようにカメラが後退して、ジェラルドのタラ農園を背景にスカーレットの小さなシルエット像の輪郭が写し出される）。（以上、スクリプトより）。

これは**画面10**、**33**に続いて3度繰り返される重要なシーンの最後である。3つのシーンは場所が同じでよく似ているが、細かい違いがある。

	（人物数）	（位置）	（時刻）
画面10	2人 （ジェラルドとスカーレット）	大木（樫）の右	日没（夕焼け）
画面33	1人（スカーレット）	大木（樫）の左	夜明け（日の出）
画面45	1人（スカーレット）	大木（樫）の右	日没（夕焼け）

そして、決定的な違いは**画面10**、**33**が物語のなかで現実に存在する光景であるのに対して、**画面45**はスカーレットの心のなかに聞こえてきたジェラルド、

アシュリー、レットの声によって喚起された、あくまでも心のなかでの光景であることだ。彼女が故郷タラに戻るのは早くとも「明日」であるから、これはスカーレットの心の中に写し出された未来の光景でなくてはならない。

ちなみに、原作（小説）は次のように終わっている。

「いま考えるのはよそう」と、彼女はみじめな気持に落ち込むのを必死におさえ、つきあげる苦痛を防ぐ方法を何とか見つけ出そうと、大きな声で叫んだ。「――そうだ、明日、タラへ帰ろう」そう思うと、いくらか元気が出た。
かつて彼女は、恐怖と敗北のなかで、タラへ帰った。そして、武装して、その防壁から、勝利をめざして、力強く出発したのだ。一度やったことなら、もう一度やれないことはないはずだ。（中略）ただ求めるのは、苦しみにそなえて息つくべき場所、傷をいやすべき静かな場所、つぎの戦いのために考えをまとめるべき隠れ家だけだった。タラを考えると、やさしいひんやりした手で、心をそっとなでられるように感じた。　（中略）
「みんな、明日、タラで考えることにしよう。そうすれば、なんとか耐えられるだろう。明日、レットをとりもどす方法を考えよう。明日はまた明日の陽が照るのだ」。（ミッチェル『風と共に去りぬ』大久保康雄、竹内道之助訳（新潮文庫）⑤第5部63章pp.491-492.）

小説では、具体的に映画の**画面10**のような光景がスカーレットの心（目）に浮かぶとは記されていない。よって、**画面45**は映画的工夫による「仮想現実」(virtual reality)と言えるものである。